（1）　昭和51年（1976年）9月6日　（月曜日）　第29334　（日刊）

上毛新聞

発行所
©上毛新聞社
前橋市出町30 〒371
電話前橋63431（代表）
夜間・休日
電話（販売・広告）5079
（編　集）4343、4344
（校　閲）4345
（出　版）4347

婚礼衣裳 でんわ（まえばし）51 3787 飾社

県立女子大学構想の骨格

清水知事に聞く

「応用力ある人材養成」

【「県民の意向を聞き〝真〟のある大学をつくる」と語る清水知事】

「総合大学」をめざす

任期中には開校したい

清水知事の公約の柱ともいえる県立女子大学構想は、大学誘致を望む多くの声に対し県が相次ぐ、さらに自民党調査会でも県立女子大設置研究会が発足するなど、急速に建設の機運が高まりつつあった。そこで県立女子大学構想の骨格や清水知事に聞いた。

―県立女子大づくりにはどのような協立の短期大学をあわせて、県立大学の性格や内容について取り組んでいくのか。

知事　まず九州最後発の県だけに、プロジェクトチームを組織して構想を練っている。九州の場合、多くの学部がなく、県立大学が総合大学になっていないのが特徴だ。県立大学の性格は「応用」に出ていきたい。

―一年間なのか四年制なのか、また、どんな学部学科を持つのかなど、いろいろ議論されているようだが。

知事　その点はまだ白紙の状態だ。今、県立大学を持つ自治体でプロジェクトチーム編成ともに、県民意見を聞いているところが多い。しかし基本的には学園の〝真〟にウエートを置いた、本当に実力のある人材養成のための大学にしたい、と考えている。

―県立大学としては短期大学と4年制大学とを併設するのか。

知事　現在、県立大学の設置費、備品費を国に要望しているが、しかしこの場合でも県の負担割合は変わらず、財政的にも県の負担は変わらない。

―大学は県都に設置する建設費がかかるうえに運営費でも莫大な赤字が出るが、県民の理解をどう得ていくか。

知事　大学は県都に設置するのが当然だと考えている。また赤字の問題については、県民の理解を得ていくことはもちろんだが、県の財政負担だけでなく、民間からの寄付金なども考えていきたい。

―大学を県都に設置するとなると、県北や県南の人たちの入学が困難になるのではないかとの声もあるが。

知事　大学づくりでは教授陣スタッフがもっとも大きな問題となろうが、県立となると優れた頭脳が入学の志願者が殺到し、ほとんどが県の頭脳で占められる恐れがあるだけに、県南や県北の人たちの入学の門戸が狭められる心配はないと考えている。

―大学となると県内でありながら県外からの学生が多くなるのではないか。

知事　大学づくりでは教授